

## 香りとの出会い

林 七雄 (自然環境研究コース教授)

北国の春はおそい。福寿草が雪解けの山の斜面に顔を出し、コブシの白い花が山を覆う。初めての人は桜かと間違ふかも知れない。桜が咲き、スズランの花の季節となる。私が学部の3年の頃、スズランの花の香りの研究をする先生がおられて、札幌の近郊、広島町(北海道)の自衛隊の演習地でスズランの花を約200kg採集し、香りの素を36g取り出したのを覚えている。学生40人くらで採集に行き、2日間キャンプして採集した。毎日朝から晩まで、スズランの花のみを手で集めていたので、その高貴な香り(ゲラニオールと呼ぶ物質の匂いですが)を鼻孔に焼き付けてしまって、結果的にはその後の人生を香りに捧げることになってしまった。

香りは不思議なもので、人によって好みも異なるが、古来から(5000年前)宗教的な行事や、防腐剤、病気の治療などに用いられてきた。最近、香水、ハーブ、芳香療法だの、普通の人でも香りに関心が高いようで、専門的な事を質問されて驚くことがある。私は18世紀の博物学者みたいなもので、夢とロマンをもって、この香りとの関わりを楽しんでいます。

良い香りは花に多く含まれていますが、花に限らず、根、葉なども香りの良いものがある。植物の香りは、植物が生きていくために必要なものである。植物は、動物のように移動できないので、生えたところで一生を送ることになる。嫌な相手がいると、毒物質(香りのあるものが多い)を出して、相手を枯らし、自己防衛する。これを他感作用(アレロパシー)と言う。また、植物ばかりでなく動物(昆虫も)も良い香りを発散するものがある。麝香鹿、蝶など良い香りを発散して、雄

が雌を誘引したりするが、人間は麝香を香水として異性を誘惑するのに用いている。これはフェロモンと呼ばれる。最近、人工的に合成した人のフェロモンが、イギリスで売り出されたと聞いている。どんな植物でも、動物に食べられないものはない。そこで、植物は、匂いを出して動物に食べられないよう、また微生物に侵されないようにしている。そんなことで、香りは、香水、食品フレーバーなど生活に重要なものであるが、植物—植物同士、動物—動物同士、植物—動物同士の意思伝達(コミュニケーション)に大切な役割を持っていることも分かってきた。

琉球列島は、東洋のガラパゴスとも呼ばれたこともある。ここは蝶が多く、蝶の楽園である。蝶も匂いの良いものがあり、レモン、モモ、ジャコウや花の香りを持つものがある。これらの香りの働きは、雄が雌を誘引したり、好きにさせたり、警報などいろいろな作用があることが明らかに成りつつある。私は毎年、琉球列島に蝶の観察に行き本能と言われていた昆虫の行動が、物質によって制御されることを、解明している。それがこうじて、今では西条キャンパスの温室で沖縄を再現しようとしている。



## 私の社会体験的教育論

西川 節行 (地域文化コース講師)

テヘランにて・・・石油危機のころ、オイルダラーを目指してテヘランに駐在した。このとき、助手の青年がテヘラン大学を受験するのを見て、面白いと思ったことがある。その頃イランでは、共通一次の様な試験をやっていたが、この採点で各科目毎の得点を2乗して加算していた。これでやると、平均型より得意科目を持つ学生が有利となるようだ。わが助手君は、1年目は単純加算では合格ラインを上回ったが、2乗方式で及ばず不合格。翌年をめたく夜間部に入学した。

アメリカ領事館にて・・・数年前、新総領事が着任したとき、「今度の総領事は大変な秀才だよ」と紹介された。有名大学出身でもなく何故かと思ったら、「普通より2年早く大学を卒業した」からだそうだった。大学の偏差値だけが基準となる日本とは違うなと思った次第である。

続アメリカ領事館にて・・・本国から名のある学者やジャーナリストが来日した機会にフォーラムなどをやっているが、その折り配られる経歴書によく「〇学部を優等で卒業した」とか「〇賞を貰って卒業した」などとある。日本では芸術系以外ではあまり見かけないが、多分、卒業の席次のほうが、大学より評価されるのであろう。そこで提案だが、当学部でもコース毎に、席次や卒論で、学長賞、学部長賞や、知事賞、市長賞など授与すれば、受けた人は、一生誇りをもって経歴書に書けると思うのだが。

ブレーメンにて・・・関連連の国際部長としてブレーメンやフランクフルトでの日独経済会議を始め、多くの国際会議を主催し、いつも淋しく感じる事があった。それは欧米の参加メンバーの大半が、博士、修士、弁護士、会計士や、教授、元大使などの称号を持つのにたいして、日本側は会社の肩書き以外は、修士号が精一杯。彼等のビジネスマンの学問の差にがっかり来たものである。ちなみに、

今、交渉中である日米新経済協定の米国側代表団の大半は、弁護士資格を持つのに対して、日本側はMBAが数名いる程度と聞く。これでは、一方的に押し捲られるのも仕方ないだろう。

再びテヘランにて・・・イランで日・米・イランの合弁銀行を設立した。その後、革命で国有化されたのは残念だが、多くの職員を採用して勉強になったことがある。この銀行では、金融関係の博士や修士の学位を持つ者は最初から部長や課長として遇していた。学位の権威と価値を認め、即戦力として評価していたわけである。そこで試みに、もし私がこの銀行で働けばどうなるか、頭取に聞いてみたことがある。当時私は、大学法学部卒、銀行勤務16年。これに対し、「銀行には顧問弁護士がいるので、君の法律知識は不要。したがって高卒扱いとなる。つぎに、銀行での貸付、預金、人事、等の経験はそれぞれ専門の部があるから不要。外為の経験は評価する。結論的に高校卒、実務経験10年位の待遇としよう。」とのことであった。翻って日本の企業の採用方針を見ると、特に文系の場合、今でも「根性、体力、リーダーシップ」重視で学部、専攻などほとんど問わないようだ。日本の場合、大学教育と企業の受けとめ方に、何か大きなミスマッチがあるような気がしてならない。



留学生諸君と広島県庁知事室にて(右端)

# 入試地獄

梶山 捷刀史 (事務長補佐)

一昔前、受験地獄という言葉があった。夢多き青春を大学へ合格するために受験勉強ばかりして、灰色の日々を過ごす生徒たちの姿を憐れんで名付けられた言葉であろう。

大学が大衆化し、入学することが比較的易しくなったと思われる現在では、この受験地獄という言葉は殆ど聞かれなくなったが、逆に今は試験を実施する大学側の試験地獄が訪れている。

昭和54年度に共通1次試験制度が導入されて以来、推薦入学、帰国子女・社会人等の特別選抜の増加など選抜方法の多様化と相俟って、国立大学の入試制度は複雑さと煩わしさの一途をたどって来た。そして、その最たるものが、現在全大学に定着しつつある「分離・分割方式」である。

国立大学の入試制度は、共通1次試験の発足で一期校・二期校制が廃止されたことにもない、受験機会の減少を招き、それが世論の批判を受けたため複数化を模索した結果、「連続方式」という制度を生み出した。これは全大学をA、Bの2つのグループに分けて試験を実施するというもので、昭和62年度の入学選抜から導入され、受験生は2つの異なる大学・学部を受験することができるようになった。

しかし、この方式は大量の入学辞退者が出て、定員の確保が難しいなどの弊害や、また、有力大学のエゴ化により、当所のもくろみが外れたため更に考えられた末に、各大学・学部の入学定員を前期と後期に分けて試験を実施するという、この分離分割方式が誕生したのである。

だが、この制度は大学にとって、特に入試事務を行う我々事務屋にとって実にやっかいな入試制度といえる。なぜなら猫の手も借りたいほどの忙しい時期に、2回も入試を行わなければならないからである。

入学試験がいかに大変で神経を使う仕事であるか、大学人なら誰でも知っており、この分離分割入試の話が出たとき、正直、私は国立大学協会や文部省は冗談を言っているのだと思った。いくら入試制度で苦悩しているとはいえ、同じ大学・学部で、しかも短期間の間に2回も入試をするという発想は、私にはとても考えられなかったからである。しかし、それが本気だということを知ったとき、一体偉い人は何を考えているのかと腹立たしくしょうがなかった。これにより、ますますひどい目に会うと予想される今後の入試事務を憂い、ただただあきれ返ったものである。平成9年度の入学選抜から、全大学がこの方式に統一されるということであるが、もはや何をかいわんやである。

古き良き時代が懐かしく思われるが、昔の入学試験はシンプルで良かった。どこの大学も、国語、社会、数学、理科、外国語のいわゆる5教科を一律に課し泰然自若としていた。いい意味で一種の権威というものがあった。それが今や大学入試センター試験の他、小論文、面接などの多様な選抜方法を取り入れる



とか、高等学校の教育を乱すことがないよう配慮するとか何とか理屈をつけ、国大協、文部省は入試制度を複雑極まりないものにしてしまった。

共通一次試験を導入せざるを得なかった理由の一つである旧二期校の不満対策から端を発したと思われる一連の入試改革の結末が、このような最悪の制度で収束されようとしているのであれば、大学にとってこれ以上の悲劇はない。分離分割入試が全大学で実施されることになれば、今まで以上に、各大学は早く入学者を確保するために、前期の定員を大幅に増やすことは目に見えており、そうなれ

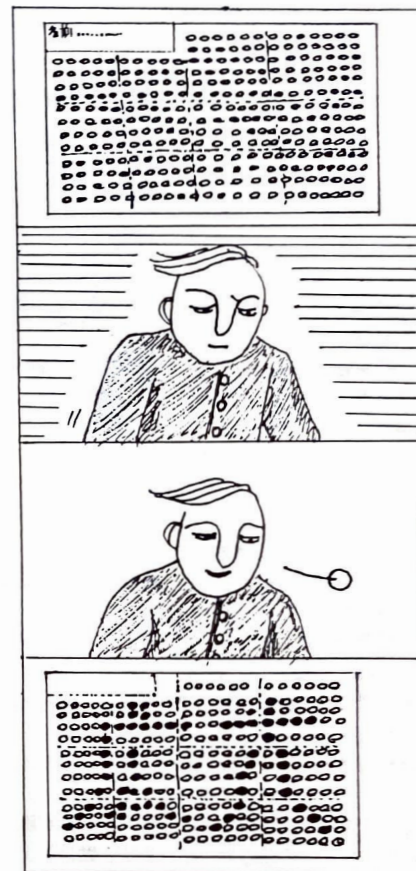
ば複数化といっても実質1枚受験となんら変わらず、形だけのものなるのではないだろうか。それならむしろ、各大学が自由に入学者を選抜した旧来のオーソドックスな入試制度に戻し、かつ、全国立大学が同一期日に一斉に試験を行って、あの評判の悪い一発勝負にしたほうがよほどスッキリする。

入試地獄を解消するために、入試センター試験も推薦試験や帰国子女、社会人入試もない、そして分離分割方式など手間ひまのかかる馬鹿げた入試をしないでも済む、かつての単純な入試制度に帰る日は来ないものであろうか。

事務の危機



マークシートに…



## 能の見方—私の場合

中尾 和江 (社会科学研究科修士課程2年)

大学内に一体どのくらいの人が能を見たことがあるのか分からないが、私は能を「見る」のが好きだ。能と言えおよそ分からないものと相場が決まっているが、そんなことはないと思っている。確かに昔は興味の持てる対象ではなかった。しかし、一見無表情と思われる能面を着けた演じ手(能においては為手という)が、集約された動きによって、実に喜怒哀楽を表現できるということを知って以来その魅力に取りつかれたのである。

さて、人が何等かの芸術を鑑賞する際、個人個人鑑賞の仕方が異なるであろうし、注目する点も様々だろうと思われる。ここでは自分なりの能の見方というものを述べてみたい。そうすることでより多くの人が能に興味を持てただければ幸いである。

能を見る際、おそらく「何を言っているのか分からない。」と大抵の人が思うだろう(私自身もそうである)。なんの予習もなくいきなり見るのは危険である。したがって、その能のあらずじく



らいはとらえておく必要がある。これは能の入門書を利用することもできるし、その当日渡されるであろうパンフレットにも載っていると思われるので可能なことだろう。もっと堪能したいのであれば、謡曲を読んでおくというのがある。この段階を踏んでおくと演能中謡を楽しむことができるので退屈することもなくなる。ここまでできれば、あとは実際の場における注意である。まず、席は指定席であれば問題ないのだが、自由席の場合、早めに行っていり席を取る心構えが必要であ

る。後ろの方のあまりいい席でないところに座ると、集中することができなくなるということがよくある。やはり正面に座るのがいいのではないだろうか(能の観客席は大きく正面、中正面、脇正面とある)。好みに応じて、脇正面というのも面白いかもしれない。いずれにせよできるだけ前に座ろう。

能が始まった際、やはり舞台に注目することが一番だと思う。人によっては謡本と照らし合わせながら見る人がいるのであるが、やはりせいかく能を「見に」行っているのであるから、舞台一点に集中したい。そして、登場人物の気持ち(感情)を舞台から読みとる、というのが私にとって能を見る際の一番の楽しみである。あらかじめ予習できているのか分かっているのでそれに合わせて舞台を見る。ここで十分その感情を見て取れるようであれば申し分ないのだが、演じられるものによっては、分かりにくいものがある。逆に痛いほど伝わってくるものもある。

私の場合、「葵の上」は、六条の御息所の気持ちが痛いほど読み取れ、大変面白いものだと思っている。どんな能でも何等かの気持ちを表しているのだから、意識してみればある程度読み取れるだろう。能の醍醐味はこれだ、と思う。

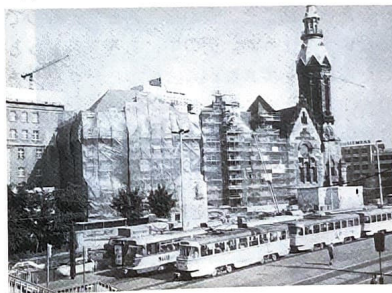
以上大いに偏った見方ではありますが、何か参考になれば、と思う。人によっては反論もあると思われるが、反論を持っていただけに能に関心を寄せている人がいればいいと思っている。

## 西から東へ

牧野 節子 (ライプツィヒ大学在学、平成3年度社会科学研究科卒)

とうとうここまで来てしまったか、というのがいまの私の本音である。約2年前日本を出て、まず旧西ドイツのマルブルクで学生として1年半を過ごした。その間様々な人と知り会ったが、とりわけ生涯の友人となり得るだろう3人のドイツ人学生と、ある教授との出会いによって、マルブルクは私のドイツでの故郷といえる場所になった。しかしある日その教授から、彼が旧東ドイツのライプツィヒ大学への転任を決心したことを聞かされた。もちろん、彼と共に私も大学を移るかどうかは、私の自由であった。そこでとりあえず機会もあったので、ライプツィヒを2回ほど訪れた。至るところ修復工事中ではあるけれども、街の中心、とくに大学周辺を見る限りでは、そんなに西との差は感じられない。その上統一直後ならともかく、もう4年たっているのだから、友人達の言うような心配もないだろう、と思いつつライプツィヒ行きを決意したのである。

転移の為の手続きや部屋探しは、教授の助けもあって比較的問題なく片づけることができた。しかし実際に1カ月、2カ月と住むうちに、何だか理由のわからないストレスが溜まってきた。未だに何が原因なのかははっきりつきとめられずにいるが、思いつく限り挙げてみると、例えば1日中工事の騒音と砂ぼこりにあっては、気持ちのよいはずはない。(本当にここで工事中でない場所はない。)



あるいは、私の住んでいる学生寮から大学へは路面電車に乗って30分程かかるが、この路面電車がよく故障するので、最初の頃は授業に遅刻しないかいつも気が気でなかった。

(現在では唯一確かなものは自分の足以外にはない、と悟って何が起ころうともイライラするのはやめた。)電話についてもそうである。私の部屋には電話線が取り付けられていたにもかかわらず、電話がつくまで4カ月ほどかかった。(しかし電話局で出会った老婦人は1年以上待たなくてはならない、あなたは早くてよかったわね、と変に慰められて怒るのはやめてしまった。)と、このような例は数え上げればきりが無い。

実質東西の壁が開いてから5年が過ぎたけれども、その差はたやすく埋められるようなものではなくなっていたことを、本当に実感している。もちろんそれは物質的な問題のみではないことは、言うまでもない。旧西ドイツにいるときは、人々の目がたいい西へ西へあるいは北、あるいは南へ(ヨーロッパの中で)向いている印象を受けていたし、私自身もそうであった。ここからは3時間も電車に乗ればそこはもうチェコである。ここでは東へ視線を向けずにはいられない。

# ドイツで思ったこと

長沢 里絵子 (自然環境研究コース2年)

この秋、所属している AIESEC (世界78カ国にある団体) のドイツのメンバーが企画した、学生たちによる模擬の国連に、同じコースの網屋さんと参加しました。これは核兵器やユーゴスラビア問題、中東問題など、世界が抱えている問題のいくつかを学生たちで話し合おうというもので、世界22カ国から約200人が集まったものでした。海外に初めて出て、いろいろなことに気付いたのですが、4つの事柄について、感じたことを述べてみました。

## \*日本の学生と海外の学生

まずここで感じたのは、日本の学生と海外の学生との間に大きな差があるということです。第一に英語。これを母国語としない人でも、みな自在に操り、3、4カ国語しゃべる人も少なくありませんでした。「なぜ日本人は長年英語を勉強しているのにしゃべれないのか？」というのが、彼らの疑問の1つでした。第二に知識の深さ。これは彼らの勉強や社会問題に対する姿勢を、改めて感じたように思います。第三に確固とした自分の考えと目的意識を持っていること。彼らの中にいると、自分がほんの子供のような気がしました。会議に出席した学生だけが海外の学生の全てではないことは十分認識した上で、自分も含めてこの格差には愕然としたのを覚えています。



## \*ドイツの街並み

今回、会議は工業地帯で有名なルール地方で開かれ、その他にはベルリン、デュッセルドルフなどをまわりました。ちょうど10月のドイツは紅葉の頃で、日本の紅葉に勝るものはないと思っていた私も、その余りにもきれいな木々の色にはうっとりするほどでした。ドイツの街並みを歩いて感じることは、景観が調和していることです。全体の色や高さなどが調和され、個を主張しており、景観を無視する日本とは比べようもありませんでした。電線も地下に埋められ、至る所に緑があり、道路も整備されています。また家々の窓辺には、きれいなレースのカーテンや花々が飾られ、道行く人々の目を楽しませてくれます。家は古いものも多かったですが、造りはしっかりとしており、機能的で丈夫です。日本人はよく、衣・食・住といいますが、彼らに言わせれば、住・食・衣の順となります。ゆとりのある生活こそ、豊かな生活と言えるのではないのでしょうか。街の中にある、ちょっとした森の中を歩きながら、散歩したりベンチでくつろぐ人々を見て、ちょっとそんなふうに思いました。

## \*それぞれのアイデンティティ

ある本で、文化に対する日本とヨーロッパの考えの違いをこう述べていました。「日本は海に囲まれた島国。よって容易に他国と区別できる。しかしたくさんの国が寄り集まっているヨーロッパでは、地理的に区別しがたいため。よって彼らは自国の文化や習慣を守っていくことでそれぞれのアイデンティティを持つ。おいしいものを次から次へと吸収する日本との差は、ここから生まれる。」ドイツで何人かの人に質問したところ、同じような答えが返ってきました。何でもありの文化も日本の文化なのかもしれませんが、文化や習慣を知り、守っていくことの大切さをこの時感じました。

## \*エレベーター

皆さんはエレベーターに乗ったとき、すぐに「閉」ボタンを押しますか？私も含めて多分ほとんどの人が、乗ったらすぐ「閉」ボタンを押すのではないのでしょうか。これは、帰国後に読んだ本に書いてあり、後から気づいたことなのですが、エレベーターに乗って自然に閉まるのに3秒しかかかりません。しか

し多くの日本人は、後から駆け込んで乗ってくる人がいるかもしれないのに、さっさと急いで「閉」ボタンを押します。私がドイツにいた時も何度かエレベーターに乗りましたが、誰一人として「閉」ボタンを押す人はなく、また「閉」ボタンのないエレベーターさえありました。私はその時「なぜさっさと閉めないのだろうか？」と思っていたのですが、あとから全く気づかないうちに、人に対する思いやりをなくしている自分に気付き、すごく恥ずかしく思いました。エレベーターだけに限らず、日常のほんの些細なところでも、その人々の中に、相手への思いやりと心のゆとりを感じる瞬間を何度も経験しました。日本ではあまり経験できないことですし、自分の行動を振り返っても、反省することがたくさんあります。ふっと日本の社会の事を思ったとき、寂しい気分になりました。

本当に大切なことは、今でもこれからもずっと変わらないと思います。「それはどういうものですか？」とドイツで質問されたとき、うまく答えられなかったけど、これからも少しずつ私なりに答えを見つけていきたいと思っています。



## 研究室紹介

総合科学部には、約200の研究室があり、学生は4年次から（社会科学コースでは3年次から）それぞれ研究室に入り、卒論等の指導を受けます。そこで、飛翔編集部では読者の皆さんに研究室の雰囲気だけでもお伝えできればと思い、今回、福岡義隆教官と上領達之教官の研究室に取材してきました。今回、久しぶりに研究室紹介を企画してみましたが、反響やご意見などをお寄せ下さい。好評であれば次号でも研究室紹介を継続したり、ページ数を増やしたりなどしていきたいと編集部では考えています。

### 福岡義隆研究室



◀ 右が福岡先生



#### ☆研究内容

- 地球温暖化の原点としての都市の温暖化（ヒートアイランド）の研究
- 日本国内の1降水ごとに含まれる酸性物質濃度の分布と擾乱の関係における研究
- 樹木年輪幅や地名と気候条件との関係における研究

#### ☆福岡先生からのコメント

「若い教官（高橋日出男教官ら）を中心に、エネルギッシュで明るくやっています。素直な学生ばかりです。私自身、年のせいと会議等で忙しいため、高橋教官にまかせっぱなしですが、できるだけ学生と接してディスカッションを深めるようにし、共に研究・教育に励んでいます。」

#### ☆研究室の紹介

和気あいあいとした自由な雰囲気、研究を行っている者の興味・関心が尊重されている。様々な大気現象をどのように捉え、考えるかについて、天気図や計算結果などをネタに、日常茶飯に活発な議論が行われているようだ。

◆助手の高橋日出男教官：「様々な気象データを目の前にして議論ができ、とても素晴らしい研究室だと思います。」

#### ◆学生から見た研究室

- 緊張感となごやかでアットホームな感じのバランスがとれた研究室
- 先輩・後輩の区別なく、何でも相談できるし、研究についても話し合え、日頃から活発に議論できる
- 福岡研は楽しい人がいっぱいいていいなあ
- 自由な中にも、研究に対する厳しさがある etc...

#### ☆福岡研にはこんな学生さん達がいます

- ◎いつもぼーっとしている ◎感情の起伏が大きく、要領が悪い ◎積極性が強くない ◎おごっぱ ◎あまり物事を深く考えない etc... でもみんな楽しい人ばかり!!

### 上領達之研究室



◀ まん巾が上領先生



#### ☆研究内容

- ペルオキシソームで機能するストレス蛋白質の検索
- ペルオキシソームの形成に関わる線虫遺伝子の単離とその機能欠失変異体の作製

上領研究室は生命科学の分野でペルオキシソームという過酸化水素代謝の場となるオルガネラに関する研究をなさっております。

#### ☆上領先生からのコメント

「千田町にいた頃は、研究室が狭い上に学生が多数いて、夕方になると僕の吸わしてもらえない空気が少なくなって息苦しいほどでした。今年は人数が減って、呼吸は楽ですが、少々寂しく思っています。心掛けている事は、今なすべきことに全力をあげる事です。従って、自分ではそうは思っていないですが、学生達からは口うるさいと思われる心配はありそうです。」

#### ◆先生はこんな人です（研究室の学生より）

授業に対しては非常に熱心で、どんな授業をやれば学生のためになるかなどを学生の身になって考えて下さり、授業の進め方について研究室の学生に相談したりなさる。でも、学生が一生懸命考えてこなかったり朝遅く来ることが続いたりすると、お説教されるなど、怖い面も多少あるらしい。

#### ☆研究室の紹介

教授、助手、学生2人というこじんまりとした研究室ではあるが、とても良い雰囲気だった。人数が少ないため、他の研究室の人と一緒に研究室で夕食を作って食べることがよくあるそうだ。飲みにはあまり行かないらしい（助手の人が酒を飲めないから!）。野外実験がないから、研究室の人とは1日のほとんどを一緒に過ごすことが多い。よって、どんなことについても話し合える間柄になってしまう、ということでした。

◆助手の文谷政憲教官：「まじめな研究室だと思います。実験系なので当たり前かもしれませんが、学生でもみんなよくやるなあ、と感心します。」

#### ◆学生から見た研究室

- 少人数なのでちょっと寂しいけれど、その分まとまっている
- 研究に対する態度は真剣そのもの
- やっぱり人が少ないと寂しいから、いっぱい学生が来て欲しい etc...

#### ☆上領研にはこんな学生さん達がいます

- ◎素直で、1つの事を始めると、他の事に頭がまわらなくなってしまう
- ◎明るく活動的で、スポーツ大好き人間。そのため、競馬の追い込みの時のように、ムチが入らないと、つい体育館に足が向いてしまう。



私は元気です!

## 新任教官紹介

### 島 唯史 (数理情報コース助教授)



10月1日付けで大阪大学基礎工学部より転任して参りました。現在、積分学、確立過程論の講義を担当しております。学生の皆さんと接する機会も多くなり、私も又新入生のような気分に入っています。

大阪にいました頃は、通勤に片道2時間かけていましたが、今すんでいる職員宿舎からだ歩いても片道20分程度ですみます。これにはたいへん助かっています。おかげで運動不足になったせいか、少し太ってしまいました。

専攻は確立過程論です。現在は主に、フラクタルと呼ばれている少し奇妙な形をした図形についての解析学に動いています。又、興味の対象も広げていきたいと考えています。

西条は酒処で、駅前には酒舎も多くあることを、こちらに来て初めて知りました。つい先日には酒まつりという催し物があり、覗いてみましたが盛況で、お酒を好きな人が多いように感じました。私も嫌いな方ではないので、旨い酒と出えることを楽しみにしております。

総合科学部に迎えていただき、様々な新しい出会いを得ることができました。この出会いをより良いものとするように努力したいと考えております。皆様よろしくお願いたします。

### 戸田 昭彦 (物質生命科学コース助教授)



本年7月1日付けで京都大学理学部より赴任して参りました。京都大学では物理学教室に属し、高分子物理学・結晶成長など、どちらかといえば境界領域に属する分野での教育・研究を行って参りました。今回、学際的な学部である総合科学部に迎えていただき、大変うれしく思っています。京都大学理学部では本年度から大学院重点化が始まりましたが、ここ総合科学部でも、私の赴任当日に開催された20周年記念シンポジウムなどを拝聴し、これから大きな変革期にさしかかっていることを実感させられました。

現在は、本年4月から赴任された彦坂正道教授と共にソフトマテリアル物理のグループを立ちあげている最中です。また、後期の授業も始まり最近では講義の準備に追われている毎日です。西条での生活にも次第になれてきましたが、赴任早々の異常な暑さや、最近の寒さには、瀬戸内出身の私も京都育ちの妻ともども驚かされています。

私のこれまでの専門は、高分子の結晶化キネティクス、結晶化に伴う構造形成、高分子材料の塑性変形ダイナミクスなど、高分子で見られる非平衡な系の振る舞いに関するものでした。これからも、高分子などのソフトマテリアルの見せてくれる多様な現象を少しでも解明できればと思っています。ソフトマテリアル物理という看板には、皆さん余りなじみがないと思いますが、古くて新しい、これからの分野です。どうぞ宜しくお願い致します。

### 浦 光博 (生態行動科学コース助教授)



本年8月1日付けで鳴門教育大学より転任して参りました。専門は、社会心理学、とりわけ対人関係についての諸問題に強い関心を抱いています。たとえば、対人関係はストレス源としての特徴もサポート源としての特徴も合わせ持っていますが、それら2つが相互にどう関連しあい、またそれぞれが人に対してどのような影響を与えるのか、といったテーマについてデータ分析や理論的検討を行うというのが、最近5年間ほどの主要な研究テーマです。

生まれも育ちも大阪なのですが、勤務先は最近足掛け6年ほどの間に、富山市、鳴門市、東広島市と転々となりました。いずれも自然の豊かな土地ですが、性にあっていのでしょうか、どの土地でも快適に過ごしてきました。こちらにきてからもブルーパルを自転車で行くと、

豊かな自然との一体感を感じ爽快な気分を満喫しています。

趣味はスキー、水泳、スキューバダイビング。とはいっても、ここ5年間ほどはスキューバをゆっくり楽しむ時間的余裕を確保できず、暇を見つけては温水プールに浮かんで、あの何ともいえない浮遊感を思い出して欲求不満を解消しているといったところです。よろしくおつきあい下さい。

### 古島 幹雄 (数理情報科学コース助教授)



琉球大学教育学部から赴任してきました。専門は純粋数学で、現在、代数幾何学、特異点理論、多変数複素解析学の研究を行っています。

トロピカルアイランド沖繩に比べると、東広島はの気候・風土は厳しく感じられます。この厳しさが、おいしい酒造りにつながっているのかも知れません。

最近では、洋酒・ビール・焼酎などに押され、日本酒離れは深刻な問題（少なくとも関係者にとって）とかしています。しかし、これは対岸の火事ではありません、我が数学界においても、若い人の数学離れが深刻化しているのです。私もこの業界の人間として、企業努力すべく、毎夜、ビールを飲みながら思案しているのですが、いい知恵は浮かびません。ただ、一人でも多くの学生さんに、数学の面白さが伝えられたらと念じながら、講義に臨んでいます。宜しく!

私もこの業界の人間として、企業努力すべく、毎夜、ビールを飲みながら思案しているのですが、いい知恵は浮かびません。ただ、一人でも多くの学生さんに、数学の面白さが伝えられたらと念じながら、講義に臨んでいます。宜しく!